

2012年  
第18回 函館港イルミネーション映画祭  
第16回シナリオ大賞受賞作品

準グランプリ

# チチプリン

準グランプリ

「チチプリン」

蟹元 依子



蟹元  
依子

## 【作者プロフィール】

かにもと よりこ

福井県出身。立命館大学卒。千葉県在住。子育てを終えてからシナリオを学ぶ。シナリオ作家協会のシナリオ講座を四回受講する。「俺の家」が第二十回（平成22年）新人シナリオコンクール最終選考に残る。

## 【梗概】

宇宙会議に出席するために星を発った宇宙人は方向音痴なために地球上を右往左往する。ようやく会場までの案内データのあたる五稜郭にたどり着くが、雷に遭い墜落してしまう。

宮田洋菓子店の息子の俊夫（6才）は、牛のマリコの放牧中に、円盤を発見し、宇宙人を助ける。スポーツ新聞に載っていた新人アイドルの若者に変身した宇宙人はゴボと名乗り、働くことを条件に、洋菓子店に置いてもらえることになった。

ゴボは、眠ったり気を失ったりすると宇宙人の姿にもどって、風船のように浮遊する。ゴボは、地球上では俊夫の父、博（35才）が作るチチプリンだけしか食べられない

かった。

ゴボが偶然に作った星型のカラメル入りのプリンが若者に人気となる。ところがチチプリンにこだわる博は、カラメルの形だけで売れることに納得できない。博はチチプリンだけを作り続け、その味は次第に支持され、リピーターが増えていった。

チチプリンが好きな小島老人（80才）は毎日買いに来てくれた。

ある日、小島のアパートが火事になり、ゴボは小島を救出するが、大勢の前でゴボの変身は解けてしまい、宇宙人の姿になる。

ゴボは、映画の「人殺しエイリアン」とそっくりなため、恐れられ、警官に銃口を向けられた。ゴボを助けようと、警官の前に立ちはだかる俊夫。かつて母・あかり（35

才)の手を離してしまった俊夫は、もう愛する者の手を離したくないとゴボを守ろうとする。

博と俊夫はゴボを連れ去り、円盤に乗せた。気絶したゴボを元気にするために、博はチチプリンを作る。

ゴボは、函館を離れ、宇宙会議に出席する。ゴボは遅刻のお詫びにチチプリンをふるまった。出席者は、あまりのおいしさに目を瞑り浮遊する。そしてこの浮遊する力でゴボの星を救おうと研究が始まる。

函館にはプリンを求めて円盤が集まってくる。

### 【登場人物表】

宮田博(35才)

洋菓子店主

宮田俊夫(6才)

博の息子

ゴボ(年齢不詳)

宇宙人

ゴボ(25才くらい)

変身すると新人アイ

ドル藤太一に瓜二つの若者になる。

小島英夫(80才)

甘党の独居老人

小島あかり(35才)

小島の娘、俊夫の母

神田隆弘(45才)

菓子組合役員

新川雅夫(35才)

新川屋店主

美穂(15才)

中学生・修学旅行生

## 1、太陽系

地球に接近する円盤。

## 2、地球くアメリカネバダ州・エリア51

円盤が飛来して地上を照らす。

六芒星の地上絵が、暗闇に浮かび上がる。

円盤が地上絵に向かって交信する音と光。

## 3、同・管制塔

新任の係官、レーダーを監視している。

新任の係官「未確認飛行物体襲来！」

年輩の係官、窓辺に設置された双眼鏡をのぞく。

年輩の係官「どうせベガから来た連

中だろ。偵察だけして帰るから放っておけ」

レーダーから機影が消える。

## 4、地球くアメリカ・ペンタゴン

五角形の建物の上空に停止する円盤。建物に向かって交信する音と光。

地上では、サイレンが鳴り響き、ライトが四方から照らされる。

発射台では、小型ミサイルが円盤に向けられる。

円盤は飛び去る。

## 5、パラオ・カープ島

星形の島に円盤が飛来し、去ってい

く。

ダイバーたち、海の中から顔をだし、  
円盤を見送る。

イルカの大群がダイバーたちの周り  
をすり抜けて、円盤を追っていく。

## 6、地球と函館

円盤が函館の上空に飛来する。

空は真っ黒な雲に覆われて行き、稲  
妻が光り出す。

## 7、函館・五稜郭

円盤、五稜郭の上空で停止する。

円盤が五稜郭に向かって交信する音  
と光。

パトカーのサイレンの音が鳴り響い

ている。

突然の落雷を受け、円盤がくるくる  
回って落ちる。

## 8、とある洋菓子店・前（6月）

古びた洋風の建物。

外装も汚れており、宮田洋菓子店と  
看板が出ている。

「チチプリン」の薄汚れた幟が風を受  
けてたなびいている。

稲妻がはしり、雨が降り始める。

## 9、同・内

壁には古びた雑誌の切り抜きが貼ら  
れている。

ショーケースにはプリンやケーキが

並んでいる。

店番をしている宮田俊夫（6才）。

入り口のガラス戸を開け、誰かを待

っているのか、坂の下の方を見る。

道には人影はない。

俊夫、「チチプリン」の幟をしまい、

ガラス戸を閉める。

俊夫、突然の落雷に腕で頭を覆う。

上空から函館山中腹に、何かが落下

するのを見る。

## 10、タイトル・チチプリン

### 11、函館山上空から見た函館全景

雨が上がり、雲の切れ間から日が射す。

右手に津軽海峡、左手に函館湾。

真っ青な二つの海に挟まれた函館の

街が見える。

函館山からロープウェイが降りてく

る。

### 12、ロープウェイ山麓駅

観光客が駅から出てくる。

一方、坂を上ってくる修学旅行生た

ち、駅の中に入っていく。

駅からさらに坂を上ると函館山の山

際に古びた洋風の建物がある。

その坂をゆっくりと上っていく老人

と犬。

老人の名前は小島英夫（80才）、犬

の名はベル。

### 13、宮田洋菓子店・前

「チチプリン」の薄汚れた幟がだらしなく垂れさがっており、ガラス戸も汚れている。

アルバイトの女子店員が飛び出してきて、

女子店員「こんなジジイのところで働けっか！ 時給は安いし、こき使うし、セクハラだし」

宮田博（35才）、スポーツ新聞を片手に飛び出してきて、

博「ちよっと髪のおいを嗅いだけけでなんだその言いぐさは！ おまえなんかこつちからクビだ！」

俊夫、店の奥から出てきて、

俊夫「お父ちゃん、セクハラはダメだよ」

博「クンクンしただけだぞ。タッチはして

ないぞ」

女子店員「クンクンはもうアウトだから！」

博「だったらそんないにおいのシャンプー

ーなんか使うな。嗅いじゃいけないのに何でそんなもん使うんだ！」

女子店員「訴えてやるからね、クンクン親

父ッ」

博「こつちが化粧品メーカー訴えてやる。日

本中のクンクン男集めて集団訴訟だ！」

女子店員「と、ともかく！ 明日バイト代

取りに来るから、用意しておいてよ」

女子店員、ぶんぶん怒って去っていく。

博、新聞を丸めて、振り回す。

俊夫、呆れて見ている。

博、体裁を取り繕って平静な顔で、店の前の椅子にすわり、スポーツ新聞を広げる。

見ているのは、競馬欄。

俊夫、博から新聞を取り上げ、

俊夫「お父ちゃん、マリコ、放牧させた？」

博、新聞を取りかえし、

博「いやあ、マリコが行きたくないって言

うんでな」

俊夫「もう！」

博「あはは。マリコの真似ならこうだ、ン

ボオオ」

俊夫、怒って、裏に回る。

#### 14、同・庭

家畜小屋が二棟建っている。

一棟は鶏小屋で、平飼いの鶏舎とネット張りの運動場に分かれている。

もう一棟には牛が一頭繋がれている。

俊夫、牛の手綱を引き、牛小屋から出てくる。

牛を引いて、函館山の林道を上っていく。

#### 15、同・前々中

店の前にワゴン車が止まる。

車のボディには、菓子の絵と神田屋の文字がプリントされている。

神田隆弘（45才）、降りて、店の中をのぞく。

神田「組合費の集金だよ」

博、出てきて、

博「ああ、ない！」

神田「新聞買う金あるんだろ」

博「ベイエリアに店増えただろ、あっちからとれよ」

神田「あっちはあっちで組合作ったらしいからな」

博「勝手に作らせんなよ。仁義つてモンがあるだろ」

神田「儲けてるモンの声を通るんだよ。それはどこでも同じだろ。払えよ組合費。

仁義つてもんがあるんだろ？」

博「だから、ない」

神田「仁義はよ」

博「んなもん、メニューにあったっけ？」

神田「ちゃんと書いとけよ。明日取りに来るからな」

神田、出て行く。

車が走り去る音。

博、レジスターを開ける。札入れのところは空である。

小島が入ってきて、

小島「プリンを一つ」

博、ショーケースからプリンを取り出し、小島に渡す。

小島は、店の前の椅子に座り、プリンを食べる。

動きがゆっくりで、なかなか口に到達しないが、顔の表情は次第に笑顔になっていく。

博、新聞を見ながらも、笑う。

小島、プリンカップを地面に置く。

ベルが、カップを舐めつくす。

小島、ベルのリードを外す。

ベル、山の中に入っていく。

## 16、 函館山中腹

俊夫、マリコを引いて、原っぱで止まる。

マリコ、草を食べる。

俊夫、木立に何か発見し、近づく。

円盤が木と木の間引つかかっている。

何だろう？ と近寄ろうとしたとき、

突然、円盤が傾き、落ちる。

円盤は直径三メートルほどの大きさ。

落ちた拍子に、円盤が破損し、部品

が飛び散る。

ココココと転がっていく操縦桿。

ベル、その横を通り、立ち止まる。

俊夫、恐る恐る円盤に近づく。

円盤の上部が割れており、宇宙服を着た宇宙人が乗っている。

宇宙人、フルマスクを上げ、俊夫と顔を見合わせる。

互いを指さし、震えている。

宇宙人は、頭が大きく、全身が銀色である。

宇宙服の胸に、五芒星のマークがついている。

俊夫、マークを指さし、

俊夫「ママ……？」

宇宙人、立ち上がるとうとするがふら

ふらしてまた座り込み、気絶する。

ベルが宇宙人を見て吠え続ける。

俊夫「ベル！」

俊夫、ベルをおさえる。

マリコの綱を、ベルの首輪に通して、

マリコと一緒にベルも逃げ去る。

円盤の中で倒れている宇宙人。

## 17、宮田洋菓子店・前

椅子に腰かけている小島。

マリコの綱に繋がれたベルを見て、

小島「どうした？」

俊夫「お爺ちゃん大変！ 円盤！ 宇宙

人！」

小島、函館山を見上げ、よろよると立ち上がる。

俊夫「いいよ、お爺ちゃん」

俊夫、ベルにリードをつけ、小島に

渡す。

小島、ベルを連れて坂を下っていく。

見送る俊夫。

## 18、同・内

中に入る俊夫。店内に博の姿はない。

壁には古びた雑誌の切り抜きが貼られている。

博がプリンを高々と掲げ、その横に、エプロンをした女性の姿が映っている。女性はペンダントをしている。

俊夫「ママ……」

俊夫、そっとショーケースを開け、プリンを取り出す。

## 19、 函館山中腹

俊夫、マリコを木に繋ぐ。

俊夫、意識がもうろうとしてい

宙人の口に、おそろおそろスプーン

でプリンを入れる。

宇宙人、目を開ける。

俊夫、飛びのく。

俊夫「チチプリンだよ」

宇宙人もギョツとした顔。

宇宙人、逃げようとして円盤の機器

を手当たり次第さわる。

エンジンがかかると音がして、俊夫、

後ろに下がる。

しかし、空回りする音がしてエンジ

ンは止まる。

俊夫、あたりを見回し、落ちている

部品を円盤の上に置く。

宇宙人、その部品を計器にはめ込も

うとするが、脱落する。

宇宙人、なすすべがなく、項垂れる。

俊夫、マリコの綱を木から外して、

連れて来る。

俊夫、マリコの背中をポンポンと叩

く。

宇宙人、宇宙服のまま、俊夫の手を

借りて、円盤の上から牛の背中に移

る。

俊夫がそろりそろりと牛を引く。

牛の背中が前後に揺れる。

宇宙人、短い脚で跨り、必死で綱に

掴っている。

## 20、宮田洋菓子店・俊夫の部屋

ベッドと勉強机が置いてある。

俊夫、フラフラと歩く宇宙人を連れて入る。

俊夫「酔った？」

宇宙人、ぐったりと座り込む。

俊夫、棚からTシャツと短パンを出す。

宇宙服を脱がせ、Tシャツと短パンをはくのを手伝う。

全身銀色の二頭身。身長は俊夫と同じ120センチくらい。短パンは長ズボンのたけである。

俊夫、宇宙服を着て、

俊夫「重っ！」

俊夫、ランドセルから写真を取り出

してみせる。

縁日の屋台をバックに、五芒星のペンダントをした女性が、幼児の手をつないで立っている。

三才くらいの幼児は、銀色のガス風船の紐を握っている。

俊夫「僕、手を離しちゃった」

宇宙人、写真の女性の五芒星のペンダントを指さし、何か叫んでいる。

俊夫「僕のママだよ」

宇宙人、写真の女性のペンダントをしつこく指さす。

俊夫「ママだって！」

宇宙人、項垂れる。

俊夫、宇宙人の背中をスリスリとさする。

宇宙人、目を瞑る。

体が次第に浮いていく。

俊夫、目を丸くして見ている。

宇宙人、天井にぶつかり、そこで止まったまま、眠っている。銀色の風船のようにも見える。

俊夫、心配になって、宇宙人の足首に紐を結びつける。

## 21、同・居間（その夜）

博と俊夫、卓袱台に向かい合って座り、

カステラの箱を開ける。

二人、カステラを一切れずつ取り、口に入れる。

俊夫「父ちゃん、あのね」

博「何だ？」

博、スポーツ新聞に赤鉛筆で印をつけている。

俊夫「やっぱいいや」

博、新聞越しに俊夫を見る。

俊夫、星形のストローで牛乳を飲み、テレビのアニメを見ている。

俊夫は食べるふりをして、カステラを卓袱台の下に隠している。

## 22、同・俊夫の部屋（夜）

博、入る。

博「ニャオー、ニャオー」

博、ベッドの下をのぞき、布団をめくる。

俊夫、慌てて入ってきて、空中に浮

かんだままの宇宙人をチラッと見る。

ガスが入った銀色の風船のように、

宇宙人が浮かんでおり、彼は眠って

いる。

俊夫「な、何？」

博「やたらコソコソしてつからよ、捨て猫

でも拾って来たんじゃないかと思つてな」

俊夫「猫は鶏を襲うからダメだよ」

博「わかつてるじゃないか。お前は昔から、

いろんなものを拾って来たからな」

博、天井を見上げ、ガス風船だと思

つて、浮かんでいる宇宙人についた

紐を引っ張る。

宇宙人、引きずりおろされ、ベッド

の角で頭を打ち、目を覚めますが、ま

た気を失う。

博「こんなものを買って来たのか？ まだ

まだガキだ」

博、出て行く。

俊夫「どこ行くの？」

博「一杯ひっかけてくるわ」

俊夫「……」

博が玄関の扉を開けて出て行く音。

俊夫、宇宙人を助け起こし、おでこ

ををスリスリさせる。

宇宙人、意識が戻る。

### 23、同・居間（夜）

俊夫、宇宙人にカステラをちぎって

差し出す。

宇宙人、大きな口を開けて食べる。

宇宙人の体の中で「ボン」と爆発音

がする。

振動で家具や卓袱台が激しく揺れる。

宇宙人、目を白黒させている。

俊夫、宇宙人の背中をスリスリさせる。

テレビは野球中継が映っている。巨人対横浜戦。

宇宙人、横浜の星のマークを指さして騒ぐ。

突然、玄関が開く音。

博がスポーツ新聞をわきに挟み、入って来る。

殴られたのかまぶたが切れている。

俊夫、咄嗟に宇宙人を自分の後ろに隠し、

俊夫「大丈夫？」

博「あの野郎、人をばかにしくさって」

俊夫「父ちゃん、喧嘩やめてよ」

博「親に説教か？ 何様だ、くそー！」

博、スポーツ新聞を卓袱台に叩きつける。

博、座り込み、手で前を払うしぐさをする。

俊夫「日ハム、やってないから」

俊夫、宇宙人を隠しながら、首を横に振る。

博「(テレビが)見えねえだろ」

俊夫、宇宙人を隠しながら、テレビの前から横に動く。

博、俊夫の後ろに何かあるのに気づき、手を伸ばす。

俊夫、慌てて、卓袱台の上のスポー

ツ新聞を広げ、宇宙人を隠す。

博「何やってんだ」

博、スポーツ新聞を引っ張る。

俊夫も引っ張り返す。

新聞が破れ、隠れていたものが姿を現す。

若者が身を屈めて座っている。

俊夫のTシャツはミニTになり、短パンが足の付け根に食い込んでいる。

俊夫「あーっー」

俊夫、自分が手にしている新聞を見る。

芸能欄に「今週の新人アイドル」のコーナーで、藤太一（25才）が立ち姿で写っている。

俊夫、新聞と若者を見比べる。

瓜二つである。

博「誰だ？」

若者「……」

俊夫「あの、この人、かわいそうなんだ。お金盗まれて」

博「そんなこと警察にいつてくれ」

俊夫「い、行つたよ」

博、若者を見る。

若者、ギョツとしている。

俊夫「初めて函館に来たんだよ。このまま帰れつて言うの」

博「俺の知ったことか」

俊夫「お願い、おいてあげて」

博「そいつにただ飯食わすのか」

俊夫「働くよ。ねっ、働くよね」

若者、うんうんと頷く。

俊夫「バイトのお姉さんの代わりに」

博「一晩だけだぞ」

俊夫「やったーあ」

俊夫、若者の手を握って喜ぶ。

博、筆筒からトレーナーとズボンを

だし、

博「身ぐるみはがれるとは災難だったな」

若者、博から服を受け取る。

## 24、同・庭・家畜小屋（翌朝）

俊夫と若者、家畜小屋を掃除している。  
る。

博、母屋の方から出てきて、生あく

びをしながら、近寄ってくる。

俊夫「（博を指さし）チチ」

若者「チチ……」

博「そういえば名前を聞いてなかったな？」

俊夫と若者、目を合わせて困惑して

いる。

俊夫、若者のトレーナーの五芒星の

マークを指さす。

若者「ママ……」

俊夫「……じゃなくて」

博「五芒星か、それがなんだっていうんだ」

若者「……ゴボウセイ」

俊夫「な、名前だよ」

博「呼びづらい名だな」

俊夫「ゴボ……なあ、ゴボ、行こう」

俊夫、牛のマリコの綱を杭から外す。

博「帰ったら、飯だからな。寄り道するなよ」

俊夫とゴボと呼ばれた若者は、函館

山の中に入っていく。

## 25、函館山中腹・円盤墜落現場（朝）

牛の綱を引く俊夫とゴボ、道を逸れて、山の中に入っていく。

俊夫、ゴボのトレーナーの五芒星のマークを指さし、

俊夫「いつつけたの？」

ゴボ「……」

俊夫「ねえ、聞いてる？」

ゴボ、困った顔で、円盤の方に走り出す。

俊夫もついていく。

ゴボ、円盤の中に首を突っ込み、何か探している。

ゴボ、ポケットサイズのラジオ風の機械を取り出して、操作する。

俊夫「何、それ？」

ゴボ「通訳機だよ、えっと、さっきのは？」

俊夫、胸の五芒星のマークを指さす。

ゴボ「名札だよ」

俊夫「ふーん、じゃあ、どうやって変身したの？」

ゴボ「新聞紙になろうとしたんだけど」

俊夫「新聞に？」

ゴボ「擬態と言って、周囲と同じ形に変わるんだ」

俊夫「ああ知ってる」

ゴボ「でも、写真の人になってしまった」

俊夫、ゴボを見つめ、

俊夫「その方がいいよ」

ゴボと俊夫、破片を拾い、円盤のそばに集める。

26、宮田洋菓子店・居間（朝）

卓袱台には、昨日の売れ残りのロールケーキが数個。

俊夫、縁側から、家畜小屋の掃除をしているゴボに向かって大きな声で呼ぶ。

俊夫「ごはんだよ」

× × ×

博と俊夫とゴボが卓袱台を囲む。

博、スポーツ新聞を見ながら、ロールケーキを食べる。

博「飲んだ翌朝はもたれるなあ」

俊夫は、ゴボにロールケーキを勧めらる。ゴボ、ロールケーキを一口食べる。

ゴボの体の中で「ボン」と爆発音。振動で家具や卓袱台が激しく揺れる。

ゴボ、目を白黒させている。

俊夫「あつ、まただ」

俊夫、ゴボの背中をスリスリとさする。

博、怪訝な顔でゴボを見る。

俊夫、部屋から出て行ってまた戻ってくる。

俊夫、ゴボの前にチチプリンを置く。

博「ボンって言うぞ」

博、プリンをゴボから取り上げようとす。

ゴボ、盗られまいとして、飛びのく。

博、執拗に追い回す。

ゴボ、逃げ回る。

二人ともハアハア苦しそうに息を吐く。

博「アレルギーなんだろ、食っちゃいかん」

ゴボ、チチプリンをスプーンで掬い、口に入れる。博、はらはらして見つめる。

ゴボ、幸せな顔で、二口目を食べる。

俊夫「プリンは大丈夫なんだね」

博「ほっとして）わがままな奴だ」

博、再びスポーツ新聞を広げて見る。

ゴボ、プリンを口に入れ、笑顔のまま

ま臉を閉じる。

ゴボ、銀色の宇宙人に戻って、浮き

始める。

俊夫、ゴボを叩く。

ゴボ、はっとして若者に戻る。

ゴボ、テレビニュースを見ている。

画面には西アジアの戦闘が映ってお

り、イスラエルの六芒星の旗が翻っている。

ゴボ、画面を指さして震えている。

俊夫「五つ！ えっ、六つ？……」

俊夫、星のどんがりの数を数えている。

玄関が開く音がして、

友達の声「とーしおくん」

俊夫、ランドセルを担ぎ、玄関から

でていく。

## 27、同・厨房く店舗

薄汚れた厨房。

博「じゃあ掃除頼むわ」

博、スポーツ新聞を片手に出て行く。

ゴボ、天井の煤を払い、床をたわし

でこすり、壁を拭き、ガラス窓をピカピカに磨く。

オーブンの煤をこそげ取り、布で磨き上げる。

博、戻ってくる。

厨房の美しさに驚くが、平静を装い、ゴボに白衣を渡す。

博「うちは手作りだから、しんどいぞ」

博、粉や砂糖、ミルク、バターなどを計量する。

大きなボウルに卵白を入れ、ゴボに泡だて器を渡す。

ゴボ、高速回転であつという間に泡立てる。

博、ゴボからボウルを取り上げ、ゆつくりと泡だて器を回す。

博「ここからはゆつくり丁寧に泡立てるんだ。大きな泡を消してキメ細かい泡にするんだ」

ゴボ、卵黄とバターを練っている。

博、ゴボの後ろから覗き込む。

ゴボ、びくつと振り返る。

博「出来具合を見たんだ。クンクン臭いを嗅いだんじゃないからな」

ゴボ「ええっ……?」

博「丁寧にクリーム状になるまで練り合わせてくれ」

ゴボ「はい」

博、天パンに円形型を置き、生地を敷き詰め、オーブンに入れる。

厨房の上に何種類ものケーキが並ぶ。

## 28、同・店舗前

博、手押しワゴンを指さし、

博「駅前で売ってくれ」

ゴボ、ワゴンを洗い、ピカピカに拭き、  
保冷ケースを乗せる。

博、竿をふりまわし、

博「何でねえんだよ」

ゴボ、奥からたたんだ布を持ってくる。

博「バカか、これは洗っちゃいけねえんだ。

閑取のまわしと同じだろ」

博、竿に幟をつける。

幟はますます印刷が薄くなっている。

下の方に「チチプリン」の文字が見える。上の方に何か書いてあったよ

うだが薄くて見えない。

ワゴンに幟をさして、ゴボ、坂を下る。

## 29、ロープウェイ山麓駅前

駅に向かう客や、駅から出てくる客がたむろしている。

ゴボ、ワゴンを観光客のそばに移動させて、

ゴボ「チチプリン、いかがですか」

観光客、クスクス笑いながら避ける。

ゴボ、閑西弁の中年の女性たちのグループのそばに移動する。

新人アイドルの風貌のゴボと目が合  
い、

閑西弁のおばちゃん、心臓の鼓動が速くなる。

ゴボ「チチプリンはいかがですか」

関西弁のおばちゃん、ゴボを指さす。

ゴボ、自分を指さし、首をかしげる。

別のおばちゃんも

女1「うちかてこの子がええわ」

女2「あかん、うちが先見つけてんから」

二人の女、ゴボを引っ張り合う。

女3「早よせんと、出てまうで」

関西弁のおばちゃんたち、ゴボを離

し、慌てて駅に走る。

小島がベルを連れて坂を上ってくる。

ベル、ワゴンの前のゴボに向かって

吠える。

小島、リードを短く持って無理やり

ベルを引いて上っていく。

小島、宮田洋菓子店の前の椅子に腰

かける。

### 30、宮田洋菓子店・庭・牛小屋（翌朝）

ゴボ、牛小屋の掃除をしている。

俊夫、縁側から庭に出て、近づいて

くる。

俊夫「いっぱい食べるよ」

マリコ、餌を食べ続けている。

俊夫「ミルク出ないんだ。赤ちゃんを産ん

だときはいっぱい出ただけだ」

ゴボ「赤ちゃん……？」

俊夫「お父ちゃんが売っちゃったんだ」

俊夫、マリコの綱を杭から外す。

### 31、函館山中腹・円盤墜落現場（朝）

ゴボ、木にマリコをつなぐ。

マリコ、草を食べている。

俊夫「じゃあ、どうして風船みたいに浮く

の？」

ゴボ「ゴボウセイは、重力が何倍もあるんだ」

ゴボ、暗い顔になる。

俊夫、ゴボの顔を心配そうに覗き込む。

ゴボ「そのせいで、隕石がたくさん飛んできて。たいていは燃え尽きるんだけど大きなものは燃え尽きずに落ちてくるんだ」

俊夫「空から」

ゴボ「びゅんって」

俊夫「危ないね」

ゴボ、頷く。

ゴボ、円盤に乗り込み、機器を点検する。

ゴボ、慌てて飛び出し、草むらを探し始める。

俊夫「どうしたの？」

ゴボ「操縦桿、ないんだ」

俊夫「大事ななの」

ゴボ、頷く。

俊夫とゴボ、草の中をかき分けて探す。

二人、首を横に振る。

### 32、宮田洋菓子店・居間（朝）

卓袱台の上に数個のプリン。

ゴボ・俊夫「いただきます」

ゴボと俊夫、プリンを一個ぺろりと食べる。

ゴボと俊夫、二個目に手を出す。

博、ゴボの手からプリンを取り上げる。

博「一個も売ってないんだからな」

博、残りをお盆に載せて、部屋から出て行こうとする。

ゴボ、悲しげに、博の後ろ姿を目で追う。

俊夫「ゴボは夕方までプリン売ってたんだよ」

博「追い出されたくねえって事かよ」

俊夫、手に持った二つ目のプリンを卓袱台の上に置く。

玄関が開く音がして、

友達の声「とーしおくん」

俊夫、ランドセルを担いで、玄関からでていく。

### 33、同・厨房

白衣姿の博とゴボ。

プリン液をカップに注ぐゴボ。

台の上のカップすべてに注ぎ終わる。カラメルが入った鍋がその横にある。カラメルをカップの底に入れ忘れてしまった。

ゴボ「あーあー」

ゴボ、慌てて、プリン液の上からカラメルを注ごうとする。

博、鍋を取り上げ、

博「止める、どうせ売り物にならん」

博、白衣を乱暴に脱いで出て行く。

ゴボ、プリンカップとカラメルの鍋を交互に見ている。

### 34、同・玄関・外

博、ジャンパーを羽織り、スポーツ新聞を脇に挟んで出かける。

ースを積む。

中にはプリンが入っている。

ゴボ、ワゴンを押して坂を下っていく。

### 35、坂

坂を下りていく博、坂を上ってくる

### 38、ロープウェイ山麓駅前

小島とベルに出会う。

博、目を合わさないようにして、小走りで行っていく。

ゴボ、いつものように、ワゴンを押して観光客に声をかけているが、体よく断られている。

### 36、宮田洋菓子店・厨房

ゴボ、オーブンから、プリンがのつた天パンを取り出す。

修学旅行生が、駅に向かって坂を上ってくる。

ひとりの女子高生、財布を開けた時に、100円玉を落とす。

### 37、同・前

ゴボ、移動式販売ワゴンに、保冷ケ

それをゴボが拾って、女子高生に渡そうとする。

女子高生、首を横に振り、プリンを

指さす。

ゴボ「ありがとうございます」

ゴボ、プリンとスプーンを渡す。

女子高生、プリンにスプーンを入れる。  
る。

女子高生「へーえ」

その友達が、女子高生の方を振り返る。  
る。

女子高生「ほら、カaramelが。かわいい」

プリンの真ん中に星形のカaramelが一本の芯のように通っている。

他の女子高生「私も」

ゴボの周りの女子高生を見て、観光客も寄ってくる。

ランドセルを担いで坂を上ってくる俊夫、ゴボの周りの人垣を見て笑顔

になる。

### 39、函館山中腹・円盤墜落現場付近（夕）

ゴボと俊夫、マリコを連れて来る。

マリコの背中には敷き藁が乗せられている。  
ている。

パトカーが下っていくのとすれ違う。

ゴボと俊夫、平静を装い、通り過ぎるのを待つ。

二人、マリコを引いて森の中に入っていく。

原っぱの木陰に、円盤が横たわっている。

二人、敷き藁をおろし、円盤を隠す。

#### 40、宮田洋菓子店・居間（夜）

博、酔っぱらって、入って来る。

俊夫、博を支えて、

俊夫「チチプリン、全部売れたんだよ」

ゴボ、うれしそうに笑う。

博「カラメルは？」

ゴボ「あとから入れました」

博「バカヤロー、勝手なことしやがって」

俊夫「みんなおいしいって食べてたよ」

博「そりゃうまいさ。俺が丁寧に濾して作

ったんだから」

ゴボ、空腹で、お腹がグーッと鳴る。

博「カステラ食うか？」

俊夫「ダメだよ、ボンって」

博「カステラでも吹っ飛ぶのか」

ゴボ、悲しそうに項垂れる。

#### 41、同・俊夫の部屋（夜）

俊夫とゴボ、ベッドに入り、目を瞑る。

ゴボ、次第に体が浮いていき、姿も

宇宙人に戻っていく。

宇宙人、天井につかえて浮いている。

俊夫、目を開け、起き上がって、宇

宙人の足に紐を結びつける。

#### 42、同・玄関外（夜）

博、そっと玄関を閉め、坂道を降り

ていく。

パジャマ姿のまま追いかけてくる俊

夫、博に追いつく。

#### 43、コンビニエンスストア・内（夜）

博、スポーツ新聞を手取る。

俊夫、冷蔵ケースの棚を見ている。

ゼリーやプリンなどの商品が並んでいる。

店内には音楽が流れており、

ラジオの声「ツイッターは？ あ、届いて

ますね。えっと、プリン姫さんより。『今日、

カラメルが芯みたいに通ってるプリン食

べたんです。しかも、星形。オトメでしょ』

って、好きだよね、女の子はこういうの。

いいんじゃない。では次の曲は……」

博「帰るぞ」

博、レジに、スポーツ新聞を置き、

五百円玉を置く。

俊夫、棚から3個パックのプリンを

手に取り、さっとレジに置く。

店員、バーコードを読み取り、

店員「おつり115円です」

俊夫、レジ袋に入ったプリンを受け取り、走り出す。

博、俊夫の腕をつかみ、

博「バカか、返せ」

俊夫「だって……」

#### 44、宮田洋菓子店・居間（翌朝）

博、卓袱台に包装された数個のロー

ルケーキを置く。

俊夫「（縁側から）ご飯だよ」

ゴボ、鶏小屋の中から手を挙げる。

× × ×

三人、卓袱台を囲む。

俊夫、星形のストローで牛乳を飲む。

ロールケーキに手を付けようとした

いゴボ。

博「売り切れは結構だけだよ、自分で食うものぐらい残しとけよ」

ゴボ、項垂れる。

博「こっちはありがたいことに売れ残っててくれる」

博、ロールケーキを手に取り、一口食べるたびに「ポン」と奇声を発する。

ゴボ、ふくれっ面で座っている。

俊夫、困った顔で博を見る。

博が頷いたので、俊夫、冷蔵庫から

三連のプリンを出してくる。

俊夫、プリンのおたを開け、

俊夫「パチーン」

と言いながらプリンを皿に乗せ、ゴ

ボの前に置く。

俊夫「パチーンプリンだよ」

俊夫、自分の分も皿に乗せ、食べる。

ゴボ、パチーンプリンを掬って食べる。

博と俊夫、ドキドキしている。

ゴボ、きれいに食べる。

俊夫「ボンって言わなかったね」

玄関が開く音がして、

友達の声「とーしおくん」

俊夫、ランドセルを担ぎ、玄関から

でていく。

#### 45、同・厨房

博、ボールに卵白を入れて、ゴボに渡す。

ゴボ、泡だて器で泡立てようとする

が、ゆっくりしか腕が回らない。

博「てめーえ、舐めてんのか」

ゴボ、ゆっくり泡だて器を回転させる。

博「タネがダメになっちまうだろ」

博、ゴボからボールを取り上げ、自分で泡立てる。

ゴボ、ゆっくり製氷機を開ける。

博「おい、どうしたんだ？」

ゴボ「だ……い……じょ……ぶ」

博「なわけないだろ」

博、ゴボの額に手を当てる。

博「冷た……」

ゴボ、保冷箱に氷を入れている。

博「体が冷え切っている。代わるからどけっ！」

博、ゴボに代わって、氷を保冷箱に詰める。

#### 46、ロープウェイ山麓駅

ワゴンで販売するゴボ、動きが鈍い。

博、遠巻きに見ている。

客「ちよつと早くしてよ」

と、ロープウェイの発車時刻を気にする。

客、プリンを勝手にボックスから取り、お金を籠に入れる。

博、思い余って、渋い顔で近づいてくる。

昨日の数人の女子高生、走ってくる。

女子高生「ラッキー、残ってた」

博、女子高生たちにプリンを渡す。

女子高生、プリンのかたを開け、

#### 47、宮田洋菓子店・厨房

女子高生「えー、違う」

博、プリン液とカラメルをゴボの前に置く。

博「いやー、昨日のは失敗作でして、この

バカが」

博「作ってみよう」

女子高生、プリンを博の前に突きだ

心配そうに見ている俊夫。

し、

女子高生「昨日のじゃなきやいらさない！」

ゴボ、ゆっくりとした動作で星形のストローを取り出す。

女子高生、帰っていく。

俊夫「それ、僕の」

博、女子高生を追いかける。

博「これが正真正銘のチチプリンだ」

プリン液が入ったカップにストローを差し込み、カラメルを筒状の部分に入れる。

女子高生「真ん中にカラメルが通ってなき

や、いや」

そして、ストローを抜く。

博「えっ？」

カラメルが、プリン液に混ざらずに保っている。

博、ゴボを見る。

#### 48、ロープウェイ山麓駅前（日替わり）

ゴボのワゴンに客が押し寄せてくる。

客「星プリンください」

ゴボ「チチプリンです」

あつという間にプリンが売りきれぬ。

ゴボ、ワゴンを引いて帰る。

#### 49、居酒屋（夜）

博と神田、新川雅夫（35才）がカ

ウンターで飲んでゐる。

博、日本酒をあおる。

神田がグラスを取り上げる。

神田「体壊すぞ」

博「うるせえ。これが飲まずに入れますか

ってんだ」

新川「何があったんだ」

博「俺のチチプリンなんだ。それを勝手に

……」

神田と新川、顔を見合わせ、首をか

しげる。

博「味じゃなくてカラメルの形で売れるな

んでどういふことだ」

神田「へ……？」

博「いいか、俺はな、味と食感にこだわっ

てやってきたんだ。おい、聞いてんのか」

神田「聞いてるって」

博「それなのに俺がこだわってきたものな

んか、星形のカラメルに負けちまうんだ。

俺がやってきたことって何なんだよー」

神田「まあ落ち着けよ」

神田、博に水を渡す。

博、水のグラスに口をつけるが、違

うと気づいて、酒を注文する。

新川「勝手に、じゃねえだろ。競馬だ、競

博「每晚試作を繰り返して、やっとできた

艇だつて」

んだ。チチプリンが」

神田「病気みたいなものだ」

新川「奥さんがほめてくれたんだろ、おい

新川「奥さん出て行って何年になるんだ？」

しいつて」

神田「俊夫くんまだ小さかったからな、三

博、照れた顔をして、

年か」

博「ああ、プリンの食いすぎで、あのやろ、

ぶくぶく太って」

50、函館山中腹・円盤墜落現場（翌朝）

新川「って、思ったら俊夫君がお腹にいた

マリコ、草を食べている。

んだろ。何度も聞いたよ」

干し草に隠された円盤の中で、ゴボ、

博、頷き、遠くを見る。

修理をしている。

神田「連絡は？」

俊夫、部品を持つなど手伝っている。

新川「爺さんに聞いてみたのか」

博「勝手に出でつたんだ。知るか！」

51、ロープウェイ山麓駅前

博、店員が置いた酒をあおり、テー

ゴボのワゴンに客が押し寄せてくる。

ブルにうつぶして眠る。

その様子を、神田と新川が見ている。

客「星プリンください」

ゴボ「チチプリンです」

プリンが飛ぶように売れる。

神田と新川もプリンを買い、食べる。

二人、顔を見合わせる。

## 52、居酒屋（夜）

カウンターで飲んでいる博。

神田と新川が入ってきて、博を奥の

テーブルに連れて行く。

神田、船盛りを注文する。

神田「星プリン、売れ行きいいじゃないか」

博「あのバカが勝手にやってるだけだ」

神田「うちのコーヒーゼリー、星ゼリーに

したいんだが」

博「……？」

神田「真ん中に星型の生クリームを入れた

いんだ」

博「あのバカに聞いて」

神田「いいののか」

博「言いも何も、やりたきやどうぞ」

新川「じゃあ、うちのもの」

博「抹茶ババロアにか？」

新川「星形のあるこ」

博「クビにしようと思ってたんだ。あのバカ、

連れてっついていいよ」

神田「すまないな」

神田と新川とともに、博、店を出る。

## 53、神田屋・前（夜）

坂の途中の古い洋館。

シャッターを半開きにして、神田と

ゴボ、入っていく。

#### 54、同・厨房（夜）

神田とゴボ、試作を繰り返している。

ゴボ、カップに星形のストローを立て、生クリームを注入する。

その周りにゼリー液を流す。

氷で冷やし、そつとストローを外す。

液に生クリームが混じっていく。

神田「生クリームは繊細だからな」

× × ×

神田、星形のストローと生クリームを冷凍庫から出す。

ゴボ、もう一度チャレンジする。

神田、星形のストローを抜き取る。

ゼリーの真ん中に星形の生クリーム

が通っている。

神田、ゴボと握手する。

#### 55、宮田洋菓子店・俊夫の部屋（夜）

俊夫、目を覚まし、天井を見る。

天井には何も浮かんでいない。

紐だけが、ベッドに引っかかっている。

俊夫、紐を握りしめる。

× × ×

博、部屋の扉を開けて入って来る。

俊夫の寝顔を見て、扉を閉める。

博が玄関を出て行く音。

#### 56、新川屋（明け方）

新川、カップの真ん中に立てたスト

ローを抜く。

抹茶ババロアの真ん中に星形のおん

こが通っている。

ゴボと新川、握手する。

窓の外、夜が明けていく。

## 57、同・居間（朝）

俊夫、慌てて部屋から飛び出す。

俊夫「父ちゃん……」

返事がない。

俊夫「ゴボ」

返事がない。

## 58、同・玄関（朝）

俊夫、玄関の外に出る。

俊夫「……」

朝もやで煙っていたが、遠くから、

坂を登ってくるゴボが見える。

ゴボ、俊夫にもたれかかる。

俊夫、支えきれず後ずさりする。

## 59、同・厨房

俊夫、ゴボを椅子に座らせる。

ゴボの腹が鳴り、眠そうに眼をこす

っている。

俊夫、博のノートを見ながら、作り

始め、味見する。

俊夫「甘くないや」

俊夫、棚のチョコレートシロップに

気づく。

プリン液を小さなボールに移し、チ

ョコレートシロップを加える。

俊夫、それを冷蔵庫に入れる。

角兵衛と招かれて……」

抹茶や、イチゴジャムもそれぞれ混

俊夫「じゃあ、これは？」

ぜて冷蔵庫で冷やす

俊夫、ゴボの口にイチゴプリンを入

× × ×

れる。

俊夫、冷蔵庫からプリンを出す。

アイドルのように投げキッス。

俊夫、ゴボの口にチョコレートプリ

俊夫、投げキッスを返し、照れた顔。

ンを入れる。

俊夫「そういえば、パチーンプリンの時は、

ゆっくりしか動けなかったね」

ゴボ、ロックテーストの革ジャンに

ゴボ、頷く。

エレキギターのいでたちに変身する。

俊夫「ゴボの体は、プリンで反応するんだね」

で、蛇のように舌を動かす。

ゴボ「チチプリン……」

俊夫「不良になっちゃった」

俊夫「父ちゃん、競馬に行ったんだ。誰も

俊夫、慌てて、ゴボの口に抹茶プリ

止められないんだ。だから母ちゃんも

ンを入れる。

……」

ゴボ、袴姿で、長唄調で、

ゴボ、項垂れて座る。

ゴボ「打つや太鼓の音もすみわたり角兵衛

俊夫「父ちゃんを連れ戻そう」

ゴボ、頷く。

人間の頭に五寸釘を突き立てている。

## 60、坂の途中、神田屋前

坂を下りていく俊夫とゴボ、店の前を通る。

俊夫「そっくり」

ゴボ、頷く。

店の前には客が並んでいる。

俊夫「殺したの？」

神田、笑顔で接客している。

ゴボ、首を横に振り、

一人の女性、携帯でコーヒーゼリーの写真を取り、メールを打っている。

ゴボ「遭遇した記憶を消すために、記憶中枢に針を刺したんだと思う」

## 61、十字街・電車の駅

俊夫とゴボ、坂を下ってくる。

俊夫「ゴボ達は違うの」

映画館の前には上映中の映画のポスターが貼られている。

ゴボ「そんなことしないよ。人は忘れてしまうものだから」

『殺人鬼エイリアン』

俊夫「僕は忘れないよ」

ゴボとそっくりの銀色の宇宙人が、

ゴボ、困った顔で俊夫を見る。

俊夫、ゴボの手を引いて去る、

俊夫とゴボ、路面電車の駅に立つ。

二人、電車に乗る。

#### 64、五稜郭

ゴボ、五稜郭の中に入っていく。

立て看板の周りに群がる人々。

ゴボと俊夫も近づく。

立て看板には「HFO飛来！ 6月

9日UFOが五稜郭上空に飛来し、

函館山方向に消えた。目撃情報求む！

UFO研究会」

俊夫、ゴボを肘で突つつき、

俊夫「落ちたんだよね」

ゴボ、恥ずかしそうに頷く。

一枚の円盤の写真が添えられ、「殺人

鬼エイリアンと同型」と吹き出しが

付いている。

× × ×

別の場所では、テントが並び、畜産

#### 62、電車内

俊夫とゴボ、並んで座っている。

ゴボ、何かを見つけ、指さす。

俊夫「どうしたの？」

ゴボ、降りようとして、ドアを叩く。

俊夫、止めに入る。

#### 63、次の電車の駅、杉並町

電車から降りるゴボ、反対に向かっ

て歩き出す。

俊夫も電車を降り、追いかける。

組合のはっぴを着た男たちが焼肉をふるまっている。

「畜産フェア」の看板を見て、観光客が集まってくる。

はっぴを着た男が二人、テントの裏で休憩を取っている。

男1 「やられたんだって」

男2 「隣の牧場でね」

男1 「牛を襲うなんて、野犬じゃないな」

男2 「宇宙人って噂までたってますよ」

俊夫とゴボ、立ち聞きして困惑顔。

俊夫、ゴボの背中をスリスリさすり、タワ―を指さす。

俊夫 「ゴボはここに来たかったの？」

ゴボ 「(首を横に振り) N系、第371星」

俊夫 「じゃあ何で？」

ゴボ 「そこへ行くための道案内のデータが、五稜郭に埋めてあるんだ」

俊夫 「あつたの？」

ゴボ、頷く。

俊夫、ほっとしてゴボを見るが、ゴボ浮かぬ顔である。

ゴボ 「(首を横に振り) 明日そこで宇宙会議が開催されるんだ」

俊夫 「(驚いて) 間に合うの？」

ゴボ 「地球時間で言うのとあと10日」

俊夫、ほっとした顔。

## 65、タワ―・展望台

俊夫とゴボ、五稜郭を上空から見る。

ゴボ 「僕、方向音痴なんだ。ここに來るまでも大砲に打たれたり、ひどい目にあっ

た」

俊夫「その星に行けるの」

ゴボ「操縦桿が見つければ」

俊夫「ないと動かないの？」

ゴボ「動くけど、宇宙の果てまで飛ばされて、

さまよい続けることになる」

俊夫、身震いして、

俊夫「コワッ、宇宙のモズクになっちゃう

んだ」

ゴボ「藻くず？」

## 66、競馬場の前

俊夫とゴボ、立っている。

多くの人々が一斉に出てくる。

博、俊夫とゴボに気づく。

俊夫「勝てたの？」

博、馬券を紙屑のようにはらまく。

博「風呂でも行くか」

## 67、露天風呂

博と俊夫とゴボ、露天風呂にのんび

りと浸かっている。

老人が入って来て、肩まで浸かる。

風呂の水が津軽海峡の水平線と重なる。

ゴボ、あまりの気持ちのよさに、瞼を閉じ、うとうとする。

ゴボ、宇宙人に戻り、浮遊し始める。

それを見た老人が驚き、入れ歯が湯の中に落ちる。

俊夫、宇宙人姿のゴボを湯の中に沈める。

老人、入れ歯を拾おうとして、湯船

## 69、坂(夕)

に顔から突っ込み、溺れる。

坂を上っていく博と俊夫とゴボ。

博、驚いて老人を助け起こす。

博の手にはスーパーの買い物袋が下

その間に俊夫と宇宙人姿のゴボ、走

げられている。

って、脱衣所に出る。

小島がベルを連れて下ってくる。

博、不審に思っ、後をつける。

博「爺さん悪かったな」

## 68、同・脱衣所

俊夫、例のスポーツ新聞を開く。

ベル、ゴボに唸り声をあげ、飛びか

ゴボ、念じて人間の姿のゴボに変身

かる。

する。

小島、ベルを抑えようとするが、振

博、俊夫とゴボを見て、

り切られる。

博「体ぐらい洗え！」

ベルがゴボに襲いかかる。

俊夫とゴボ、ほっとして、風呂の中

ゴボ、必死に逃げる。

に駆け込んでいく。

## 70、宮田洋菓子店・玄関内（夕）

ゴボ、ベルに尻を噛まれそうになりながら、玄関の中に飛びこみ、扉を閉める。

扉の向こうでベルの吠え声。

## 71、同・居間（夕）

ぐったりと横たわっているゴボ。

博、卓袱台に買ってきた惣菜を並べ

る。

俊夫、皿と茶碗を並べる。

俊夫、冷蔵庫からパチーンプリン

最後の一個を取り出す。

ゴボ、真っ青になって、首を横に振る。

俊夫「父ちゃん、プリン作ってよ」

博「チチプリンしか食わないこいつが悪い

んだろ」

俊夫「父ちゃんのじゃなきや、だめなんだ」  
博「客は味なんか求めてない。カラメルが、  
星型というだけで売れるんだ。やってら  
れるか」

博、立ち上がり、出て行く。

俊夫「父ちゃん……」

玄関から博が出て行く音。

## 72、同・俊夫の部屋（夜）

俊夫がすやすやと眠っている。手には紐が握られている。

その紐は、天井付近に浮かんでいる宇宙人の足に結わえられている。

酔っぱらった博が入って来る。

俊夫の寝顔を眺める博。

俊夫の横にもう一人分、布団が盛り上がっている。

博、俊夫の手から紐を外す。

博、紐を握ったまま、部屋から出て行く。

扉が閉まり、宇宙人は扉に激突して落ちる。

宇宙人、目をさまし、頭をさする。

### 73、同・店舗（夜）

うす暗がりの中、壁に貼られた古い雑誌の切り抜きには、プリンを高く掲げる博の顔。その後ろに妻の姿が映っている。

博、店の中に置かれた幟をじっと見ている。

### 74、同・厨房（夜）

博、鍋でカラメルを作り、カップに注ぐ。

卵を割り、牛乳を沸かす。

人間の姿のゴボ、頭をさすりながら入って来る。

博「うちのはチチプリンだ」

ゴボ、頷き、手伝う。

プリン液を丁寧にしノアで濾す。

カップにプリン液を流し込む。

お湯をはった天パンにプリンを並べ、オーブンに入れる。

### 75、坂（日替わり）

制服姿の女子中学生、坂を上っていく。美穂（15才）である。

神田屋のワゴン車が追い越していく。

くれ」

博「バーターか」

新川「そんな言い方しなくても」

博「断る……って言いたいところだが」

博、立ち上がり、頭を下げる、

博「頼む」

神田と新川の驚いた顔がゆるんでい

く。

## 77、同・中

神田、新川、入ってきて、

新川「大当たりだ！ 星ゼリーも星ババロ

アも」

博「自慢しに来たんか」

神田「ベイエリアに直売店出すんだ。星プ

リンと三個セットで売りたいんだが」

博「うちのはチチプリンだ」

神田と新川、顔を見合わせる。

神田「じゃあ、せめてチチプリン売らせて

## 78、同・外

神田と新川、ワゴン車で下っていく。

坂を上る美穂とすれ違う。

79、同・中

美穂、外からヨーケースのプリン  
を見ている。肩には修学旅行のリボ  
ンがついている。

美穂、入ってきて、

美穂「あの……」

博「あれは売つたらんぞ」

美穂、驚く。

博「帰ってくれ」

美穂、ヨーケースのプリンを指さ  
し、

美穂「(赤面して) チチプリン」

博、立ち上がり、美穂を見る。

博「食べて行きますか」

博、プリンとスプーンを渡す。

美穂、テーブルに古い観光ガイドを

置き、食べ始める。

函館のページには、プリンと博の顔  
が映っている。博の横には妻の姿。

『函館一のプリン』という文字が躍つ  
ている。

博「その本は」

美穂「母のです」

美穂、壁に貼られた切り抜きを見る。

美穂、切り抜きと目の前の博を見比  
べ、店内に誰か(博の妻)を探す。

博、苦笑いする。

美穂、食べ終わり、満足そうな顔。

美穂、去っていく。

博、その後ろ姿に深々と頭を下げる。

## 80、同・台所（夜）

博、鼻歌を歌いながら、チャーハンを作っている。

俊夫、流し台の上に、皿を置く。

博、皿にチャーハンを盛る。

博「（ゴボに）食うか」

ゴボ、申し訳なさそうに首を横に振る。

## 81、同・俊夫の部屋と廊下（夜）

ベッドの中で、ゴボと俊夫、国語の本を読んでいる。

博、廊下から、ほほえましく見ている。

俊夫、紐を握ったまま、うとうとし始める。

ゴボ、紐のもう片方の端を自分の足

に結びつける。

ゴボ、目を瞑る。

変身が解け、宇宙人に戻っていく。

そしてふわふわと体が浮かんでいく。

## 82、函館駅（日替わり）

急ぎ足で出てくる一人の女性。

名前は小島あかり（35才）

## 83、とあるアパート

タクシーを降りるあかり。

ベルは階段の下で長いリードに繋がれている。

ベル、飛び出してきて、あかりを見ている。

あかり、急いで階段を上がる。

84、ベイエリア・赤レンガ館・全景

86、宮田洋菓子店・居間〜庭（日替わり・朝）

85、同・内

菓子店が並んでいる。

端の「ツインスター」という店に行  
列ができています。

星ゼリーと星ババロアが二個セット  
でかわいらしく包装されている。

店員「セットを5組ですね」

冷蔵ケースの中からゼリーとババロ  
アが次々と減っていく。

チチプリンだけが残っている。

店員、「星ゼリー、星ババロア完売」

の札をショーケースの上に置く。

客「じゃあ、プリン3つ」

店員、チチプリンを箱に詰める。

ゴボ、俊夫の部屋から、くせ毛頭で

慌てて飛び出してくる。

縁側から庭を見ると、博と俊夫が、  
鶏舎の掃除をしている。

俊夫「ゴボ、おはよう」

俊夫、卵を手にとって、

俊夫「フジコの卵かけごはん」

ゴボ、苦笑いする。

× × ×

俊夫、卵かけごはんをおいしそうに

食べている。

ゴボ、チチプリンを食べる。

博「飽きないのか」

ゴボ「店長のプリンは宇宙一です」

俊夫、冷や汗をかきながらゴボをつつく。

博「お前の話はでかくていいや」

俊夫「でもね、お客さんは目新しいものが好きだからね」

博「そうでもないぞ。ちゃんとわかってくれる人もいる」

俊夫「お爺ちゃんのこと？」

博「そういえば爺さん、最近来ないな」

ゴボ、心配そうな顔。

## 87、アパート・前

ゴボ、地図を片手にウロウロしている。

ベル、階段の下から飛び出してきて、長いリードを引きずりながら唸り声

をあげる。

ゴボ、ベルの声に気づき、立ち止まる。

ゴボ、真つ青な顔で階段を上る。

ベルが追いかけて階段を駆け上がった。くる。

リードが目いっぱい以上の長さにも伸びて、その反動でベル、階段を落ちていく。

## 88、同・二階の一室・内

小島は布団で臥せっている。

あかりが、小さな台所で、おかゆを作っている。

ドアをノックする音。

あかり、ドアを開ける。

ゴボが立っている。

小島、寝たまま、目で合図する。

ゴボ、小島のそばに座り、

ゴボ「店長が心配して僕を」

小島「(あかりに) 博の店の……」

あかり「(ゴボに) こき使われてるんじゃないな

い?」

ゴボ、首を横に振る。

あかり「……そう」

ゴボ、保冷バツクからプリンを出して、あかりに渡す。

あかり、小島を起こし、スプーンでプリンを口に入れる。

あかり、口からこぼれたプリンを、指で小島の口の中にそっと入れてやる。

あかり「ちよつと麻痺が残ったの」

あかり、小島の手をスリスリとさする。

ゴボ「あつ」

ゴボ、あかりの胸のペンダントを見る。

五芒星の形をしている。

ゴボ「あーあー」

あかり、ペンダントを触り、

あかり「縁日で買ったの……」

### 89、同・外へ路地へ表通り

階段を下りてくるゴボに、吠えかけるベル。

ベル、長いリードを突けたままゴボを追いかける。

ゴボ、逃げ惑い、細い路地を抜けて、

表通りに出る。

ゴボ、周囲を見渡し、

ゴボ「……？」

## 90、バイエリア・赤レンガ館・前

観光客が、土産物を下げて歩いていく。ゴボ、道がわからなくなってしまう。

神田「星ゼリー、飽きたか？」

店員「そうでもないと思うんですけど。観光客は新しい物好きで」

光客は新しい物好きで

店員と神田、二件先の店の行列を見ている。

神田「新商品考えないとな」

店員「でも、チチプリン、リピーターが多いんですよ」

客がチチプリンを指さし、

客「プリン、4個」

店員、箱に詰める、

神田「そんな……（頷いて）そうだな」

客、プリンの箱を受け取り、去っていく。

ゴボ、客に頭を下げる。

## 91、同・中・「ツインスター」前

ゴボ、少し離れたところから見ていく。

店員、プリンを6個箱に詰めて、客に渡す。

神田、店の中に入って来て、ショーケースの中をのぞく。

## 92、坂道

ゴボ、焦った顔で、坂を上ったり下ったりしている。

スーパーマーケットから、あかりが出てきて、ゴボを見つける。

あかり「送るわ」

あかり、ゴボと一緒に歩き出す。

## 94、同・外、裏道

博と俊夫、マリコの綱を引いて帰ってくる。

## 95、同・居間

ゴボ、入る。

ゴボ「店長？ 俊夫君？」

家は静まり返っている。

庭から鶏の声や羽ばたきなど騒がし

い音が聞こえる。

ゴボ、縁側から庭に飛び出していく。

## 93、宮田洋菓子店・前

ゴボ、手を振ってあかりと別れ、玄

関から入っていく。

あかり「……」

あかりの足が、玄関の方に一歩進む。

あかり、目を伏せ、向きを変えて、

坂を下りていく。

## 96、同・庭

ゴボ、慌てて鶏小屋に入る。

97、 同・鶏小屋の中

血まみれの二羽の鶏、喧嘩を続けている。

ゴボ、鶏小屋に入り、二羽を捕まえる。

ゴボ、気絶して、宇宙人の姿に戻り、

空中に浮き始める。

鶏、飛び上がり、宇宙人を突つつく。

宇宙人、目を覚ます。

98、 同・庭

博と俊夫、マリコの綱を引いて入る。

二人、鶏小屋の騒がしい物音を聞きつける。

博、マリコの綱を俊夫に預けて、鶏

小屋の方に走る。

博、鶏小屋の中のゴボと鶏を見る。

100、 同・鶏小屋

博、三本爪のホークを持って入って

くる。

博「おまえは？」

宇宙人「ゴボです」

博「まさか」

宇宙人「円盤が墜落して、俊夫君に助けて

もらいました」

俊夫、新聞を持って入って来る。

博「俊夫に手を出すな！」

99、 同・鶏小屋

鶏、ゴボの手を突つつく。

ゴボ「イテッ」

俊夫「違うんだ！」

博「(俊夫に) うちに入つとれ」

俊夫「ゴボは友達だよ」

博、苦渋に満ちた顔。

博「……なれるもんか」

俊夫「父ちゃん！」

博、三本爪のホークを振り上げ、

博「(宇宙人に) 出てけ！」

宇宙人、俯く。

俊夫「ゴボ！」

俊夫、例のスポーツ新聞を広げる。

宇宙人、それを見て変身し、人間の

ゴボに戻る。

博「そうやって化けてたのか」

俊夫「ゴボはもうすぐ帰るんだ。だからお

願い」

博「……」

突然、半鐘が鳴る音。

消防自動車の音が遠くに聞こえる。

ゴボ、博、俊夫、小屋から飛び出していく。

### 101、同・店舗前

坂下の方向から火の手が上がっている。

博「あれは……」

ゴボ、走り出す。

俊夫、走り出す。

博、俊夫を捕まえて、

博「お前はここにいろ、いいな」

俊夫「だっってお爺ちゃんが……」

## 102、道

ゴボ、火の手が上がっている方向に  
向かって走る。

ゴボとすれ違う神田屋のワゴン車。

## 103、宮田洋菓子店・前

博と俊夫が言い合っている。

神田屋のワゴン車、止まる。

新川が、後部の扉を開け、空のケー  
スを博に渡す。

博「爺さんどこ火事なんだ。途中まで乗せ  
て行ってくれ」

俊夫、こっそりと後部の扉からワゴ  
ンに飛び乗る。

後部の扉が閉められる。

前の座席に、神田と新川と博が乗る。

## 104、道

道が渋滞している。  
焦る博、車から降りる。

## 105、新川屋・前

ワゴン車、止まる。

新川、後部の扉を開ける。

俊夫が飛び出す。

新川「俊夫君……」  
俊夫、走り去る。

## 106、アパート前の路地

人々が細い路地に向かって走ってい  
く。

消防自動車が路地の中に入れず立ち  
往生している。

野次馬は路地の手前で止められている。

ゴボ、そのわきを走り抜け、警官に制止される。

あかり、買い物袋を提げたまま立ち尽くしている。

群衆の中でゴボとあかり、目が合う。

ゴボ、頷き、隣の家の塀を乗り越える。

あかり「(警官に) 父が中にいるんです。通してください」

警官「危険です。我々に任せてください」

それでも通ろうとするあかりを、警官、必死に抑える。

ゴボ、アパートとの間の塀を乗り越えて、アパートの敷地に入っていく。

群衆の後方で俊夫、立ち往生してい

る。

俊夫、身をかがめ、人々の足元を縫って、前に前に出て行く。

## 107、アパート

階段下で、ベルが震えている。

ゴボ、ベルの長いリードを柱から離し、階段を駆け上がっていく。

ベルも駆けあがろうとするが、火を恐れて、うずくまる。

燃え盛るアパート。

火の手と煙の中から、小島を背負ったゴボが姿を現す。

ゴボ、階段を下りる。

あかり、警官の手を振り払い、ゴボに駆け寄る。

警官「子どもを離しなさい」

宇宙人、事態に気づき、悲しい顔で、子どもを抱いた手を離す。

ゴボ、あかりに小島を渡す。

小島、あかりの肩に掴って立つ。

火傷を負ったゴボ、数歩歩きながら、

子ども、泣きながら宇宙人から離れる。

変身が解けていく。

警官、宇宙人に向けて銃を構える。

野次馬1「何だ？」

俊夫「撃たないで！」

野次馬2「映画の……」

俊夫、人だかりの中から飛び出し、

野次馬3「エイリアンだ！」

警官の前に立ちほだかる。

群衆、恐れて、後ろに二、三步後退する。

あかり、俊夫に気づき、小島を支え  
たまま、叫ぶ。

宇宙人、逃げ遅れて転んだ幼児に気

あかり「俊夫、こっちにおいで」

づき、抱き起す。

俊夫、あかりを見る。

母親の悲鳴。

俊夫「ママ……？」

野次馬4「牛も襲われたんだぞ！」

あかり、頷いて、

あかり「危ないからこっちにいらっしやい」

俊夫、首を横に振る。

俊夫「僕、ママの手を離してしまった」

あかり「違う、私が……」

俊夫「もう離したくないんだ」

警官、銃を降ろし、

警官「坊や、こっちにおいで」

俊夫「(ゴボに) 逃げてー！」

ゴボ「ムリだよ」

俊夫「星が危ないんでしょ」

ゴボ、頷き、走り出す。

警官が、ゴボを撃つ。

弾がゴボの肩をかする。

ゴボ、倒れ、宙に浮き始める。

博「撃つな！」

博、飛び出してくる。

宇宙人、次第に高く上っていく。

人々、空に舞い上がる宇宙人の体を、息をのんでみている。

俊夫「ゴボが……、宇宙のモズクになっちやう」

博、合点して、周囲を見回す。

ベルが、長いリードを引きずって吠えている。

博、長いリードを「投げ縄」代わりにして、投げる。

持ち手部分の輪が、宇宙人の足首に引っかかる。

博、リードを俊夫に渡す。

俊夫、ベルのリードの途中を握り、あかりを見る。

俊夫「ママ、僕離さないから」

あかり、頷く。

俊夫「ベル、走れ！」

博と俊夫とベル、宇宙人を浮かべたまま走る。

野次馬がその後をついていこうとする。

小島、あかりの肩から手を離し、野次馬の前に立ちふさがり、手を広げる。

麻痺が残った手が震えている。

### 109、森の中

博と俊夫、リードを手繰り寄せ、宇宙人をリードから外す。

木に繋がれたベル、吠えている。

俊夫「ベル、ダメ！」

ベル、吠えるのを止めるが、興奮しており、穴を掘りだす。

博、宇宙人を円盤に乗せる。

俊夫、宇宙人の背中をすりすりさせる。宇宙人、気絶したままである。

俊夫「父ちゃん、プリン……」

博「材料がない」

俊夫、ガクツと肩を落とす。

博と俊夫「あっ……」

博と俊夫、走り去る。

### 110、宮田洋菓子店・庭

博、マリコの乳を搾る。

俊夫、鶏小屋から卵を持って出てくる。

## 111、同・厨房

博、卵を割り、牛乳を沸かし、プリン液を作る。

俊夫、カラメルをカップの底にスプーンで入れる。

博、カップに液を分け、天パンに湯をはって、オーブンに入れる。

俊夫、例のスポーツ紙を見せる。

宇宙人、人間のゴボに変身する。

ゴボ「マリコのおいがする」

博「うちのはマリコのチチプリンだ」

ゴボ、博を指さし、

ゴボ「チチ……」

博「バカか、牛と一緒にするな」

ゴボと俊夫、笑う。

博、保冷箱ごと円盤に乗せる。

## 112、森の中（夕）

木に繋がれたベル、あちこちに穴を掘っている。

円盤の中でぐったりしている宇宙人

博と俊夫が、保冷庫を持って駆け付ける。

ける。

博、宇宙人の口にプリンを入れる。

宇宙人、目を覚ます。

博「これだけあれば、迷子になっても日干しになるまい」

遠くから人の声が聞こえ、ライトが

いくつも見える。

博「ゴボ、急げ」

ゴボ、首を横に振り、手元に操縦桿がないことをしぐさで示す。

人々の声が次第に大きくなってくる。山を上ってくる人々のライトが近づいている。

あせる博と俊夫。

俊夫「(ベルを指さし) あーあーあー」

ベルが、何かを啜えている。

俊夫、ベルに近づき、口から抜き取ろうとするが、ベル、唸り声をあげて、奪い返すことができない。

ゴボ、円盤を降り、ベルに飛びかかる。

ゴボとベル、ゴロゴロ転がりながら

格闘する。

小島の声「ベル！」

ベル、驚き、口からぼろっと操縦桿を落とす。

あかりと新川、小島をワゴン車から

降ろす。

神田、運転席から降りてくる。

ゴボ、操縦桿を拾い、円盤に乗り込む。

ゴボ、変身がとけ、宇宙人に戻り、

宇宙服を着る。

操縦桿を差し込み、円盤が震えだす。

宇宙人のゴボ、博と俊夫を見る。

博と俊夫、円盤から離れる。

円盤のふたが閉まり、垂直に、上へ

と上っていく。

人々が、集まり、円盤を見上げる。

### 113、円盤・中

宇宙人のゴボ、地上を見下ろす。

円盤からは、博、俊夫、あかり、小

島が寄り添って、上空を見上げてい

るのが見える。

ベルは相変わらず吠えている。

その姿が点のように小さくなり、やがて函館の夜景が一望できる。

の宇宙人が険悪な顔で座っている。

一つの椅子だけが空いている。

宇宙人1「# \$@% &\*+?=->K: Y^」

テロップ「地磁気嵐が吹き荒れて、人工衛星まで落ちてきたんです」

## 114、宇宙を飛ぶ円盤

宇宙人2「+√^# Y&#:#%\$#"?>^\*」

## 115、N系、第371星

五角形の建物の前に、円盤が着陸する。

宇宙人のゴボ、降り立つ。

宇宙人の兵士が集まる。

その隊長「@%\$:#\*./」

扉が開き、ゴボが慌てて入る。手には保冷庫を下げている。

宇宙人3「\$@./: @ Y^=&\$"/\*??:|~+=+@%」

テロップ「お前の星の問題を話し合っているというのに、遅刻とは」

宇宙人のゴボ、やばいという顔。

宇宙人のゴボ、恐る恐る保冷庫をテ

## 116、同・会議室

広い会議室に、各星の代表、29人

ーブルに置き、チチプリンを出す。

宇宙人4 「&\*+~~\*.@i.&+\*」

テロップ 「何だねそれは？」

宇宙人のゴボ 「\$@+\*+|=+<、@%?、@i.&+\*?」

テロップ 「宇宙一おいしいプリンです」

29人の宇宙人、プリンを食べてとろけそうな顔になり、目を閉じる。

29人の宇宙人、宙にふわふわ浮き始める。

空いた椅子がスイングし始める。

宇宙人のゴボ 「\*|=+<、@&v?~?|=+<、@&?i\$」  
テロップ 「僕らの星なんです。僕ら

の手で最後まで守るー」

29人の宇宙人、目醒め、椅子に座る。

宇宙人4 「\$g、<+&i、@i%&?i.@i.&+\*」

テロップ 「プリンので引力をやわ

らげられないか」

29人の宇宙人、賛成と拳を上げる。

宇宙人のゴボ 「チチプリンならできるかもー」

宇宙人1 「%v?~z`p>&%\*!w%&」

テロップ 「では、五稜郭に調査隊を」

## 117、函館の夜景

円盤が五稜郭の上空に一列に並んでいる。あたかも着陸の順番を待っているようである。

## 118、宮田洋菓子店・前

外に出る博と俊夫。

テレビの音声が聞こえる。

音声 「函館の上空に円盤が次々と飛来して  
います」

博と俊夫、夜空に並ぶ円盤を見る。

二人の前を通る宇宙人らしき人影。

(了)

本電子書籍は、2012年11月30日発行の『第18回函館港イルミネーション映画祭2012 第16回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリ受賞作品を抜粋したものです。シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第18回函館港イルミネーション映画祭2012  
第16回シナリオ大賞 準グランプリ受賞作品

# チチプリン

作：蟹元 依子

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2013年4月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>

---